

目をそらした先には、鬱蒼と繁った大家の庭がある。名前も知らないさまざまな草木が伸び放題に伸びて荒れ果てたような印象の大家の庭に、花をつける種類の植物はあまりないようだった。桜は言うに及ばないが、ユキヤナギ一枝、ツツジ一株見あたらない。

全体的に常緑樹が多いのか、春爛漫のこの季節になっても景色としては代わりはえがしない。雨のせいではぶつたように見える大家の庭の深緑色をした繁みを見ていたら、突然心臓に猫の舌で舐められたようなざらり、とした感触が走った。なぜか全身に鳥肌が立った。

小学生のころ、宿題を忘れてきたことを急に思い出したときの感覚に、それは似ていた。もう取り返しがつかない。そうだ、自分はまだ取り返しがつかないほどの大きな忘れ物をしてきている。それが何であるかは、自分でもよく判っていた。

つとめて考えまいとしていたことに思いの大半を持っていかれそうになる。行雄の部屋の窓のすぐ前にある深緑色の繁みを見つめていると、それは物凄い吸引力でもって行雄の心と身体を引っ張り、ふと土や緑色の葉っぱに自分が同化してしまいそうな錯覚をおぼえた。心臓のざらりとした感触はまだ消えない。

窓の上のトタンの軒から雨粒が落ちて、行雄の首筋に着地した。ヒヤリとした感覚に我に返った行雄は、慌てて窓から身を離れた。

部屋のドアが、ノックもされないままいきなり開け放たれたのはそのときだった。

ドアのむこうに、サキが立っていた。

しばらくぶりで見ると見るサキの姿に行雄は笑顔になりかけたが、サキは仁王立ちで突っ立ったままびくりとも動かない。そうしてサキは、泣き出しそうな顔をしていた。

——約束だよ。

いつかと同じように、以前に聞いたサキの声がすぐ耳もとで甦った。行雄の身体が一瞬硬直した。

——助けたげて。アキちゃん、助けたげてよ。

自分とはんでもない思い違いをしていたのではあるまいか。泣き出しそうなサキの顔を見ながら行雄は思った。

行雄は急ぐあまり足をもつれさせながら、隣室とのあいだの壁に近寄って耳を押しあてた。

やっぱりだ。耳を押しあてて注意しながらではないと聞き取れないほどの細い声で、アキは泣いているのだ。泣き声が聞こえなくなったのは、アキが泣くのを止めたからではない。衰弱したアキの泣き声が、壁ごしでは聞こえないほど弱いものになっていたからだ。たつたのだ。

——助けたげてよ、おにいちゃん。約束したよ。

その声はすでに、サキのものであると同時にサキのものではなかった。